

エキストラ

motoi

夜風が吹き荒れている。夜空の暗闇とは対照的に新宿の街は光り輝いている。美しい夜景のことを「100万ドルの夜景」だとか「宝石を散りばめたよう」などと称することがあるが、なるほどそれは的を射ていたと今になって知る。この眩いばかりの光は自らの存在と価値を知らしめるためのものだ。自己顕示欲にまみれた実に醜いものである。これを形容するには人の欲を体現した金や宝石はやはり核心をついているだろう。しかし、そんな醜態を恥ずかしげもなく晒している奴らは過去の自分の現身そのものであり、今の自分と比べればよっぽどマシな人間なのだ。

二〇一四年一〇月二十二日午前一時。新宿の高層ビル群のとあるビルの屋上。そこで私は夜景を茫然と眺めながらそんなことを考えていた。

さして貧しくない家庭の長男に生まれて特に不自由なく幼少期を過ごした。運動はできなかったが勉強だけはできた。都立の進学校にすすみ、大学にも順調に進学した。そして新宿に本社をかまえる証券会社に就職したのがもう二十年前になる。大学のサークルで知り合った他大学に通う女性と付き合い、そのまま結婚。十七年前には一人娘もできた。何の変哲もない人生だったがそれでも娘ができた時は本当に嬉しかった。

その人生を私は今、終わらせようとしている。

いったい私はなぜこんな状況に陥ってしまったのだろうか。何処で道を踏み外したのだろうか。それとも最初から私の運命は決まっていたのだろうか。

二〇一二年七月三〇日。その日は記録的な猛暑で朝から身体にまとわりつくようなじめじめとした暑さが続いていた。蝉がよく鳴いていた。結婚十年目で購入した我が家は広くはないが二階建ての一軒家で三人家族であった私達にとって十分すぎる家だった。二階の寝室から下り、台所で娘の弁当をつくる妻を横目に一人で朝食をとっていた。家から仕事場へは少し距離があったため、近所の中学に通う娘と朝食の時間が重なることはあまり無かった。娘は遺伝なのか運動よりも勉強が得意で中学受験を経て有名進学校に通っており、妻の話によると定期テストの成績も悪くはないらしい。私の自慢の娘だった。朝食を食べ終わった私は汗ばんでしまっていた寝間着からスーツに着替え、荷物を持って玄関にきたところで階段を下りてきた娘と目が合った。「いってらっしゃい」と笑顔で娘は手を振ってきたので私も「いってきます」と笑顔で手を振りかえした。妻とも同じ動作を繰り返し、外に出ると夏の突き刺さるような日差しに照らされて目も眩むような暑さだった。蝉の声がうるさかった。

翌三十一日。昨日から続く暑さは留まることを知らず、昨夜は熱帯夜となった。会社の帰りに付き合いで居酒屋に寄ったので少し寝不足だ。普段通り朝食を食べ、支度を終わると私は玄関に向かった。部屋から出てきた娘と廊下でばったり会うと娘は少し驚いた顔をした後にいつも通りに笑顔で「いってらっしゃい」と声をかけてきたので私もいつも通り返した。

「いってきます」

昨夜の酒宴の影響かほんのりと煙草の匂いがしている気がしたが、鼻を近づけて嗅いでも気になる程ではなかったのでそのまま玄関の扉を押しあけて炎天下に足を踏み入れた。

その日の午後だった。仕事場の私のもとに妻から連絡がきた。ずいぶん取り乱したような様子であったがどうにか妻の言うことは理解することができた。しかし、それを信じることはできなかった。

「『娘』が万引きをした」

まず妻の言葉を疑った。何か悪い冗談を言っているのではないかと。私のあの娘が万引きなどするはずがない。次に自分の耳を疑った。だが彼女の言葉ははっきり聞こえてくる。とにかく私は信じきれないままに妻に言われたスーパーマーケットに急いだ。汗でワイシャツをぐっしょりと濡らして息も絶え絶えに目的地に着くとスーパーの警備室に通された。そこには娘と妻がパイプ椅子に座っており、机の向かいには店長と思しき男性が座っていた。机の上にはガムや飴などの菓子類が置かれている。確かに盗みを働くには手頃な大きさなのだろう。ここまでの状況を踏まえるとどうやら娘が万引きを犯したことは事実らしい。私は少し取り乱しながらも娘にその理由を聞いたが、娘は俯いて何も話そうとしなかった。商品をポケットに入れたところを店員に見つかったらしく犯行は未遂に済み、初めての犯行だったということもあり警察には連絡をしないでもらったのが不幸中の幸いだった。

深々と頭を下げて娘に謝罪をさせ、私たちは帰路についた。その道中、妻が何とか取り持とうと夕飯の話などをしてきたが私と娘には反応はなく、結局私たちは一言も言葉を交わさなかった。その晩は中々寝付けなかった。娘が罪を犯した事実を受け入れられなかった。しかし、動機がわからない。娘には十分な金額の小遣いもわたしていたのだから万引きをしなければならぬほど金銭に困ることはないはずだし、何より娘がそんなことをするということが動機がない限りやはりおかしい。そこまで考えたところで私は思考をとめた。いくら私が思考を巡らせても答えはない。娘が自分から言ってくれる日を信じて明日からはいつも通り接しよう。

二〇一二年九月十八日。私たちはあれから日常に戻っていた。すぐに普段通りに戻ることはできなかったが一ヶ月もするともう私はあの日のことを忘れて接することができた。ただあの日を最後に出かけ際の挨拶だけは交わさなくなっていた。

夏の猛暑が嘘だったかのように九月に入ると肌寒い日が続いていた。上着を着こんで電車で数十分揺られた後に私は仕事場に着いた。ちょうど上着を脱ごうとしたその時だった。携帯の着信音がなった。妻からだった。妻は「あの日」よりも冷静を保って状況を説明してきた。始業の鐘が鳴る前だったそうだ。生徒は立ち入りを禁じられている屋上の扉が開いていることに気付いた教師が娘と同級生数人と共に煙草を吸っていたらしい。そう淡々と説明する妻の声音は冷酷に思えた。

私は「今から行く」と妻に告げて電話を切ると上司に休暇をとる旨を伝えてから会社を出た。学校に着くとなるべく他人に見られないようにしながら校舎の一階にある応接間に足を向けた。一緒に煙草を吸っていたという同級生の姿はなく、部屋には娘と妻、校長と担任と名乗る者がいた。忘れかけていた「あの日」の記憶が鮮明によみがえる。娘に謝罪をさせようとしたがこの日、娘は決して頭を下げようとしなかった。一週間の停学処分を受け、私たちは帰宅した。家に着く

とすぐに娘を食卓につかせ、その向かいに私は座り、娘に説教をした。しかし何を言っても娘は俯いて聞こうとしなかった。その様子を見て私は悲しかった。今まで娘を信じて時間と労力を犠牲にして彼女に注いできた愛情と財産はすべて無駄だったのか。そして私は一通り説教をした後にこうこぼした。

「お前には失望した」

それが自分の今思うすべてだった。娘はピクリと眉を動かさずはしたもののやはり何も話さなかった。

それから私と娘は一言も言葉を交わさなかった。しかし、そうなってはじめて気づいたが娘と会話をしないことは私の日常に別段影響を与えなかった。自分でも驚くほどだった。影響がないのだから悪影響もない。学校側が事件を大事にしなかったので会社での自分の立場にも変化は無かった。妻は娘に寄り添って話を最後まで聞こうとしていたようだが、その甲斐は無かったらしく最近では珍しい西洋品を集めることを趣味にして楽しくやっているようだ。多大な期待をかけていた娘が不祥事を起こしたことは残念だったが私は普段と変わらない日常を送れていることにとりあえず満足していた。

二〇一三年二月十日。新年になってから何度か雪が降り、厳しい寒さだったがこの日は曇りであることを除けばとても過ごしやすい気温だった。久しぶりの休日ということもあり、スーツを新調するために私はデパートに来ていた。煙草の一件から娘はすっかり変わってしまった。黒かった髪を金色に染めあげて耳には派手なピアスをつけ、夜遊びも多くなっていると妻から聞いていた。かつての彼女の姿は跡形もなく俗にいう不良と化していた。全てを悔い改めなければ進学のための金は払わないと妻を通じて言い含めてあるが、娘は態度を変える様子はないのでおそらく進学する気はないのだろう。そうはいっても私も親なので最低限の資金的援助はするつもりだった。そんなことがあっても、いまだに私は変わり映えのない日々を送ることができていた。

自分のサイズに合った手頃なスーツを二、三着選ぶと、試着をして紺のスーツを一つに決めて会計にうつる。現金の手持ちが少なかったので普段はあまり使わない夫婦兼用のクレジットカードで会計を済ませようとする。カードを店員に渡すとその店員は困ったような顔をして私にカードを返してきた。店員によると既に残額が底を尽きているらしい。にわかには信じることはできなかった。店員に残額を調べさせたがどうやら真実らしい。自分の目で確認したのだから疑う余地はない。怒りと憤りがこみ上げてきた。誰がこんなことにしたのか考えられる人物は一人だった。家に帰り、彼女の帰宅を待った。間もなく彼女は帰宅した。妻だ。私は感情的になり、いったい金はどうしたのだと彼女を問いただした。いつかの娘のように黙秘されることも予想していたが、彼女は予想外の一言を言っただけだった。

「それが何だというの」

開いた口が塞がらなかった。普段の彼女なら何か問いただされようなら萎縮してしまうはずだ。私の知る彼女はそれほど気弱な女性だった。

彼女は続けた。

「あなたは私のことも[娘]のことも全然見ていない。表面だけを見て全てを見た気になっているだけよ。カードのお金が無くなったのはもう随分前のことよ。共有の口座からは[娘]の教育費と生

活費くらいしか使ってなかったのにそれが無くなっていたことをあなたは知らずに、知ろうともせず生活していたの。あなたは自分の生活が乱されなければ家族がどうなっているものうのと生きていられる人間なのよ。今まで私たちがどれだけ苦しんできたかわかる？[娘]はあなたからの謂れのない自分勝手な期待をずっと重荷に感じてきたの。万引きをした日に私になんて言ってきたか知ってる？『自分をしっかり見てほしい。しっかりと叱ってほしかった。』って言ったのよ。年頃の娘が親に叱ってほしいだなんて異常だと思わないの？」

私は瀟然と立ち尽くすしかなかった。久しぶりに妻の声を聴いた気がした。彼女の声をその息遣いを。「異常」という言葉が耳から離れなかった。私は異常というものが大嫌いだった。異常は往々にして悪い意味でしか捉われない。それに異常というレッテルを一度はられればその呪縛から逃れることはできない。一度でも罪を犯せばその事実が無くなることはないし、周囲の人間が事実を忘れない限り犯罪者は死ぬまで犯罪者のままだ。しかも犯罪などという記憶は鮮烈なものであるからして当人はおろか周囲の人間が忘れることはない。ならば事実から目をそむけ、目をつむるしかないではないか。忘れることが出来ないのであれば無かったことにするしかない。それが平和で通常なのであればたとえ上辺だけになろうとも不自然であったとしても元通りを演じるべきではないのか。実際に私はそうしてきたしそれが娘にとっても妻にとっても幸せであると信じていた。他と変わらないいつもどおりの日常を皆が求めていると疑いもしなかった。

私は湧き上がる感情をすべて吐き出した。

「俺がどれだけお前たちのために尽くしてきたかのかわかっているのか？『娘』にどれだけ金と時間と労力を使ったか。自分で稼いだ金で育てた娘に一丁前の大人になってほしいと思うのは当然だろう。」

徐々に語気は強まっていった。

「何がおかしい？何が異常だ？俺はいたって普通の至極当然なことをしてきただけだ。それを乱しているのはお前らだ。俺の日常を壊すな。それができないのなら俺の家から出て行け。」

声を張り上げて思いのたけを言い放ったようで最後にはもう理性なんてものは無かった。

私たち家族が崩壊していくのにそう時間はかからなかった。私と妻は離婚し、娘は妻が引き取ることになった。表向きでは夫婦間の金銭トラブルとして話は通された。私の取り計らいで資産を乱用した妻に罪はかからなかった。あの女性とは金輪際関わりを持ちたくないという私が思っていたからだ。とあるついで聞いた話によると彼女と娘もうまくは行ってないらしい。「元」妻の趣味であったところの西洋品の収集はどうやら名の知れない宗教の影響らしく、娘も嫌気がさしたのであろう。そんな娘も進学はしなかったらしいが今どんな状態にいるかなどは知る由はなかった。

一方、私自身は離婚してしばらくは会社にも通勤していたが最近では会社にも休みがちになってしまった。あの日の妻の言葉が忘れられなかった。「異常」。突きつけられたその言葉は私にとってとても重要なことだった。私の人生は一貫して普通だった。変わり映えせず、平凡で月並みな可も不可もない人生。しかしそれで満足だった。一般的な家族を築けていたと信じてやまなかったのに彼女たちは違かった。彼女たちを狂わせていたのは私自身だったのかもしれない。いや、そんな考えも結局私のエゴであり、自責の念にかられる平均的な日本人を演じようとしているだけなのかもしれない。彼女たちの非行は結果として私の異常性を浮き彫りにし、私はもう元の

生活に戻れなくなってしまった。

二〇一四年一〇月二十二日。

かつての回想に耽っているとビル風は私を急かすように強まっていた。私は自分の中から異常性を排除しようと生きてきたのだから自分自身の根源的な異常性に気付いてしまった今、こうするしかない。新宿の街並みは依然として光を放っているが夜は深まり眼前に広がる景色はまるで夜の海のような不気味さを醸し出していた。その海に私は身を委ねた。

堕ちていく中、私はさらに昔のことを思い出していた。娘の生まれた日のことである。娘の産声を聞いた私はめずらしく大きな声をあげて喜んだ。異常な私と異常な妻、異常な娘というどうしようもない家族であったが、少なくともあの時だけは心を共にしていたと思う。もしかしたらこの異常性を持っていることは当たり前のことだったのかもしれない。人は皆何かしらの異常性を持ち、それは個性なんてものより強烈で刺激的なものでそれこそが人を人間たらしめているのではないだろうか。いままで否定し続けた異常性こそが最も常識的なものだったのではないだろうか。最も重要で根本的なことなのになんかいまさらになって気付く。

しかし、気付いたときにはもう…。